

## 鹿児島近代文学 (3)

阿井景子「西郷家の女たち」

「鹿児島近代」教育研究センター 特任助教 鈴木 優作

西南戦争は一般に、薩軍の勇敢さとともに語られてきた。例えば、池波正太郎は『西郷隆盛』（人物往来社、1967年）において、「政府軍は薩軍の猛勇をおそれ、八個旅団の大軍をもって十重二十重の包囲網をめぐらし、むしろ薩軍の苦笑を買った。」と叙述している。また、司馬遼太郎「翔ぶが如く」（『毎日新聞』1972年1月1日～1976年9月4日）では、「熊本鎮台の兵士というものは、言わば土百姓、素町人の烏合の衆たるに過ぎないのであるから、いかにしても、剽悍なる薩摩隼人の向こうに立ちそうにもない」と樺山資紀中佐が回顧している。両作における女性は、「鹿児島の女たちが城山へやって来ては、食物や酒をはこんだり、将兵の洗濯までやった。」（『西郷隆盛』）、「この当時、旧幕の遺習として、宿場の旅籠には飯盛女とよばれる遊女が抱えられている。」（「翔ぶが如く」）とあるように、銃後で性的役割をこなす固有名のない集団として後景化されている。そこに男性／従軍者からの視点であって、女性／銃後の視点は不在である。

一方で、西南戦争を女性／銃後から描いたのが、阿井景子「西郷家の女たち」（『別冊文藝春秋』1986年10月）だ。阿井は鹿児島純心女子高等学校の出身である。本作は西郷家に仕えた女中よしの子孫・黒川ゆきえに取材し、西郷隆盛の妻いとを視点人物とした物語である。

以下、物語を追っていこう。薩摩では男子は忠誠を旨とする「士道」を、女子は「心を和らげ、辞をしとやかにし操を守る」「婦道」を叩き込まれる。幼いいとは「婦道」に従い、「男たちの志を大切に」することを学ぶ。西南戦争が始まると、政治から乖離

した立場にある女達からすれば、「いとや女たちに政情がわかるはずもな」く、男達に対して「ひたすら戦勝を祈」ることしかできない。しかし、戊辰戦争で斃れた西郷家の次男・吉二郎に続き、末弟・小兵衛が戦死する。四人の兄弟が戊辰戦争従軍時に「戦死を第一の功」と誓ったのに対して、「死は残された者にとってあまりにも悲しい。」「いととは男たちの戦いが恨めしかった。」といとの悲痛な思いが描かれる。

以下の記述を参照すると、戦は男の晴れ舞台、という認識は男たちに共有されていたのかもしれない。

戦国以来の習風の中にある薩摩人の多くは、何よりも戦いというものが、男子の一生にとっての唯一の晴れのものであるということが、政治上の是非善悪などとは無関係に、それを越えて信仰以上のものになっていた。（「翔ぶが如く」）

「西郷家の女たち」で男たちの戦いに恨みを投げかけるいとの見点は、戦争を描く文学における男性からの視点を相対化する重要な役割を担っているのではないだろうか。

「わたしたちが戦争について知っていることは全て「男の言葉」で語られていた。わたしたちは「男の」戦争観、男の感覚にとらわれている。男の言葉の。女たちは黙っている。」（スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ著／三浦みどり訳『戦争は女の顔をしていない』（群像社、2008年7月、原著1985年）というように戦争はジェンダー性が如実に顕現する事象であって、性的な視座を替えればその捉え方は変わってくるということだろう。